



TITLE:

カウツキーの帝國主義概念

AUTHOR(S):

靜田, 均

CITATION:

靜田, 均. カウツキーの帝國主義概念. 經濟論叢 1955, 75(5): 330-348

ISSUE DATE:

1955-05

URL:

<https://doi.org/10.14989/132423>

RIGHT:

經濟論叢

第七十五卷 第五號

カウツキーの帝國主義概念……………靜 田 均…(1)

英國稅務會計における減價償却の生成・確立過程 (1) ……高 寺 貞 男…(20)

下請工業分析に對する試論……………吉 澤 榮 藏…(38)

日本鐵鋼業の成立と資源 (Ⅲ) ……………小 野 一 一 郎…(56)
難 波 平 太 郎

[昭和三十年五月]

京都大學經濟學會

カウツキーの帝國主義概念

靜 田 均

第一次大戰の前夜におけるドイツ社會民主黨は、黨員一〇八萬を擁する歐洲最大の社會主義政黨として、その威容を誇つていた。一九二二年の總選舉では投票總數の三分の一をしめ、帝國議會に一一〇名の議員を送つた。この數字は國會議員三九七名の約三割にあたる。しかしながら、黨内事情はおもひのほか複雑であつて、指導的幹部の間における政治的見解はいろいろの相異を示し、けつして一本に纏つていたわけではない。ビバンの指導するところによると、黨はおよそ五つのグループに分れてゐた (E. Bavan, German Social Democracy during the War, 1918, p. 243)。

第一、極左派 最も急進的な分子であつて、非妥協的であり、革命的である。國會議員K・リーブクネヒト、P・レーンシュ、スタットハーゲンのはかF・メーリング、ローザ・ルクセンブルク、クラフ・ツェトキンを含む。徹底的な階級闘争を標榜し、議會主義や舉黨一致に拘泥せず、街頭アジテーションを辭さないばかりでなく、政治活動において非社會主義政黨との協調を排斥した。

第二、中間左派 『ノイエ・ツァイト』を主宰するK・カウツキー、『フオールウエルツ』のH・ターノーを

じめ國會議員H・ハーゼ、レーデブルがこれに屬し、議會活動に最大の價値を認め、街頭示威を斥ける點において極左派と相容れないが、非社會主義政黨との協調に反對であるかぎりでは、修正主義者とも相容れず、むしろ極左派に同調した。

第三、中間右派 P・シャイデマン、R・フィッシャーを頭目に有し、理論的には傳統的な黨の綱領を固持する立場にあつたが、實踐的には修正主義者との妥協に傾いた。

いずれにせよ、中間派は左派および右派を合すれば、黨内の大部分をしめ、中心勢力を形づくつていた。

第四、穩健な修正主義者 ペルンシュタインの率いるところの一派であつて、あからさまに階級闘争を放棄し、議會活動では非社會主義的急進主義者と提携しようとした。暴力革命によつて資本主義社會を轉覆しようとする考を放棄し、むしろ一連の部分的改革をつみかさねることによつて、社會民主主義の諸目的を達成することを望んだ。E・グビット博士はこの派の主要人物の一人であり、ルドウィヒ・フランクのごとき稀に見る有能かつ魅力的な人材も加わつていた。

第五、帝國主義的社會主義者 いわば極右派であり、大陸軍と大海軍、植民地の膨脹、さらには國內産業の保護の要求を支持した。この派は數において強大ではなかつたが、相當の逸材を擁していた。コルプ、E・フィッシャー、W・ハイネのはか熱烈な植民地論者ケッセル博士の名も見出される。

右に見たように當時のドイツ社會民主黨は、思想および政見を異にする種々雑多な分子の寄り集りであり、主流は中間派によつて代表されたとはいへ、極左から極右に至るかなり幅の廣い共同戦線にはかならなかつた。パーロはその近業の中で、第一次大戰前のドイツ社會民主黨の歴史を特徴づける二つの大きな風潮として、民族主義的

感情によつて彩どられていたこと、および暗黙のうちに純粹なマルクスの教義を放棄していたことを指摘し、前者はラッサールおよびシワイツァーに溯り、また後者は修正主義論争を通じて明かになつた、と述べている (A. J. Behn, The German Social Democratic Party 1914-21, 1949, p. 67)。要するに、以上のような性格と特色をもつたドイツ社會民主黨であつてみれば、戦争の勃發によつて内部的な矛盾を暴露するに至つたとしても、あながち不思議ではないかもしれない。果然、一九一四年八月四日、戦時豫算案の賛否をめぐる党内は動搖した。そして黨は明白に三つのグループに割れた、——左右兩派と中間派に。

戦争の重壓がドイツ社會民主黨に與えた急激な變化は、まことにおどろくべきものがあつた。それはこれまでの五つのグループを、三つのグループに壓縮し單純化したというだけではなく、勢力の分布に大きな變動をもたらし、すなわち右派は最も優勢となり、中間派は次第に衰えた。左派はもとより少數の精銳に限られていた。驚いたことには、極左派に屬したP・レーンシュやカウツキーと同じ中間派と見られたH・クローノーがいまや轉向して右派に加盟した。戦時中における右派の人々は、總じて『社會主義帝國主義者』と呼ばれているが、その色調はいろいろであつて、生え抜きのものであれば、開戦後あらたに轉向したものもある。前者はおおむね眞正銘の實利主義者型であるのに反し、後者はよほど毛色が變つていて、ロマンチスト型とソフィスト型に分けられる。そしてレーンシュがロマンチスト型の標本だとすると、クローノーはさしずめソフィスト型の代表だといふことができよう (猪木正道『ドイツ共產黨史』昭和二年七三頁以下)。こうした轉向者續出の中にあつて、よかれあしかれあくまで中間派の立場を守り抜こうとしたのが、カウツキーである。

二

一九一五年の二月に執筆されたと想定されるパンフレット『民族國家、帝國主義國家、連邦國家』(Nationalstaat, Imperialistische Staat und Staatenbund, 1951)の中で、カウツキーは書いている。『わが黨の極右の人々は極左の人々と同様、帝國主義は現存の生産方法にとつて一つの必然である、と説く。もちろん、一方「極右」の人々がそこから結論づけるのは、われわれは帝國主義を支持しなければならぬ、ということにはかならない。他方「極左」の人々はいふ。帝國主義は資本主義的體制において不可避である。しかしわれわれは帝國主義を欲しないから、それに對抗して社會主義をもつてこなくてはならない。つまり半世紀このかた、われわれが資本主義的支配のあらゆる形態に對置した社會主義のプロバガンダにとどまらず、その即時實現をはからねばならぬ』(一七頁)。ここでカウツキーが社會主義の即時實現といつてゐるのは、極左派の黨に對する要望『革命的行動の即時の宣傳と準備』を指すこと、推測にかたくないが、おそらく戰時下の峻嚴な檢閲を顧慮して、わざとより穩かな表現にかきかえたものとおもわれる。それはともかくとして、左右兩派に共通なのは、帝國主義と資本主義との關係を不可分一體のものと見、いずれも一種の必然と解する點にある。しかし帝國主義に關する兩者の態度は、根本的に背馳するのであつて、右派は現體制を擁護しようとするに反し、左派は現體制の轉覆をはかろうとする。同じ必然性の認識から全く別個の戰術をひきだすかぎりにおいて、彼等はまさしく對蹠的であるといつてよいが、カウツキー自身はいわゆる中道をまもつて兩者のいずれにもくみしようとしなない。

さきの引用句につづいてカウツキーは書いている。『これはすこぶる急進的に見えるが、社會主義の即時實現を

信じないすべての人々をば、帝國主義の陣營に追いやるだけである。われわれは社會主義を欲するけれども、それを有しない間は、帝國主義者に甘んじなければならぬ、よきマルクス主義者は、「一般的發展傾向」に逆らうことを許されぬから、というようなたぐい（極右）の社會主義者たちの水車に水をそそぐにひとしい』（前掲書一七頁）。

つまりカウツキーは左派の主張に反對を表明し、その言辭がどんなに勇壯であつても、結局は保守的な、または浮動的な分子を右派の陣營に追いやる効果をもたらすにすぎない、と主張するのである。

一九一五年四月、『ノイエ・ツァイト』誌上に前後四回にわたつて、『學び直すべき二書』（“Zwei Schriften zum Umlernen”）と題するカウツキーの論文が連載された。問題の二書というのは、同じ年に刊行されたレーンシムの『ドイツ社會民主主義と世界戦争』（Dr. Paul Leusch, Die deutsche Sozialdemokratie und der Weltkrieg）とクーノの『黨の崩壊？』（H. Canow, Partei-Zusammenbruch? Ein offenes Wort zum inneren Parteistreit.）のことである。さきに述べたとおり、レーンシムもクーノも左派または中間派から、戦争の勃發後あざやかに右派に轉向した代表的な人物であるが、カウツキーの前記の論文は、彼等の所説に對して中間派の立場から批判を加え、その反省を求めようとするものであつた。しかるにこれを契機として、カウツキーとクーノとの間に帝國主義の諸問題をめぐつて論戰が展開されることとなつた。この論戰の争點は一二にしてとどまらなければいけれども、その全貌をつくすことは紙面の許さぬところであるから、ここではもっぱら帝國主義の概念規定に關する部分だけを取扱うことにする。順序としてまず必要なかぎりにおいて、クーノの帝國主義論の要旨を摘記しなければならぬ。

三

第一次世界大戰の勃發を契機として、ドイツ社會民主黨の主流がこれまでの反戰的態度を一擲し、祖國防衛を口實に、カイザー政府の戰時豫算に協賛を與えたばかりでなく、戰爭の遂行に對してむしろ積極的な支持を示したことは、心ある人々の少からず意外としたところであり、黨の内外から囂々たる非難と惡罵を浴びるにいたつた。光輝ある歴史的傳統をもつドイツ社會民主黨はいまやイデオロギーと戰術の混亂から崩壞に歸した、という聲のおこつたのも無理はない。『黨の内紛に對する公開狀』という副題をもつクローノーの前記パンフレット『黨の崩壞？』は、こうした情勢を前に彼一流の立場から敢えて辯明を試みようとする企圖したものであつた。彼は資本主義の現段階を帝國主義と規定するに拘らず、資本主義が没落に際會していると見ることは、『獨斷』であり、『幻想』にすぎないと考える。しかもこうした『獨斷』ないし『幻想』は、昨今にわかに起つたものではなく、過去二〇年の久しきにわたりドイツ社會民主黨内の一部に信奉されているところであつて、こうした迷蒙の打破こそ、社會民主主義者にとつて緊急の課題であるとなす。クローノーによれば、資本主義はまだ發展の極致に到達してはいない。そうである以上、いたずらに打倒帝國主義を呼號する極左派の言動はナンセンスであり、それは機械の進歩的役割を無視して、これを暴力沙汰で破壊しようとする狂奔したかつてのラディカル運動に類する。

彼はいう、『新しい帝國主義的な發展段階』とは、資本主義の新しい内部の金融的な生活條件から生長した發展の時期であり、以前の發展段階がたとえば大規模の機械的工業の形成にあつたと同じように、社會主義にいたる必然的な經過段階である。それは單により進歩した自乗された資本主義にすぎず、そこではいまやこれまでのように本

來の産業資本ではなく、權力に到達した金融資本が第一バイオリン弾きになつてゐる』（原本一四頁）。換言すれば、帝國主義とは金融資本主義の時代に見られる新しい現象であり、社會主義に到達する前段階に現れる新しい様相にはかならない。それは資本主義が一定の發展段階に達しさえすれば、どの國にも見られるのであつて、かのフランスの同志たちの彈劾するように、ドイツにのみ特有の現象ではない。

さて以上の論述の中でわれわれの注意をひくのは、第一にクローノーが帝國主義を『經濟的現象』として扱つてゐるという點であり、第二に一種の歴史的必然の產物と解しているという點である。このような把握の仕方から、彼がひきだした結論は、ひつきよう二つに要約することができる。一つは、帝國主義が歴史的必然を意味するかぎり、これを簡單に阻止したり、またこの段階を經由せず一足とびに社會主義に到達したりすることはできないから、金融資本主義のもとで社會の生産力がのびきるまで時機をまたねばならぬという見解であり、二つには、帝國主義が社會史的に條件づけられた必然的な經濟現象である以上、將來の發展がこれと異つた方向をたどる可能性は考えられないという見解である。さきの見解は、左派の主張を斥けると同時に戦争の支持を裏づけ、もつて右派の立場に理論的根據を与えるものであり、のちの見解は、暗黙のうちにカウツキーの超帝國主義論に對する否定を示唆するもののように察せられる。

四

われわれは前節において、帝國主義に關するクローノーの把握の仕方について見た。カウツキーは彼の論文『學び直すべき二書』の中で逐一その批判を企てているのであるが、さきのことわつておいたとおり、ここでは帝國主義

の概念規定に關する部分しかとりあげるわけにいかない。

さてカウツキーはまず、『クローノーの議論は、帝國主義と近代資本主義とを相等しいものとするところに根ざしている』と前置きしたのち、帝國主義という言葉をどのように理解すべきであるかという問題を提起し、この言葉の來歴にまで溯つて論陣を展開する。帝國主義という言葉は、カウツキーによると、もとをただせば、ラテン語の *Imperium* から出ていたのであつて、世界國家ないしは皇帝國家と關連のある政治的傾向を現わす言葉であつた。それが十九世紀にはいつてから、ナポレオン一世の皇帝國家のもとにあるフランスで、その政治を特徴づけるにふさわしい言葉として、愛用されるようになった。今日フランスの同志が、世界を支配しようとするドイツ皇帝の權力傾向を特徴づけるために、ドイツに對して帝國主義という言葉を用いるのは、フランスのこうした故事に立ち歸ろうとしているにすぎない。彼等は帝國主義という言葉を、ちょうど一般のドイツ人がフランスのボナパルティズムやロシアのツァーリズムについて述べる場合と同じように使用しているのである。

ところで十九世紀の九〇年代になると、帝國主義という言葉は、イギリスでは別な意味をもつようになつた。つまりイギリス本國とその植民地との結びつきを一層緊密なものとすることによつて、小英國にかえるに大英國をもつてしようとする傾向を指稱したのであり、そのようにして大帝國がつくりだされるはずであつた。だから、イギリスでも『帝國政策の特殊な種類』をいあらわすために用いられたことは、たしかである。『その場合に決定的な意義をもつたのは、植民地に對する關心であつた。なかならず關稅政策の特別な措置によつて植民地はより密接に本國と結びつけられねばならない。しかるに植民地に對するいやまず關心は、新しい領域の獲得に導き、さらには他の諸強國との對立および海軍の充實にまで導いた。大植民帝國および軍備に對する類似の傾向は、一部はすでに

以前から存在したし、また一部は時を同じうして他の資本主義列強にも現れた。イギリスはこの新しい政策に刺戟を與えたわけではないが、それに名稱を提供した。それは一般に帝國主義と稱せられた』（原本一一〇頁、波多野譯本四七頁）。

以上これを要するに、カウツキーの批評の第一點は、從來の用語例を正しく尊重するかぎり、帝國主義という概念が政治活動ないし政策を意味するものであるに拘らず、クラーノーは資本主義の特定の發展段階を意味せしめていること、そしてそのために無用の誤解と混亂を生ずる惧れがあることに向けられている。

反駁の第二點はこうである。クラーノーは、帝國主義が資本主義の新しい内部條件からどのようにして生ずるかを究明したものが、マルクス主義の陣營に見あたらぬことを歎き、産業資本ではなく、金融資本の支配する新しい資本主義の發展段階を帝國主義の段階であると誇らしげに規定するのだが、カウツキーは自分こそその分野における最初の開拓者であると抗辯し、かつ『金融資本』という概念を明確に刻印づけたのはヒルファディングであつて、クラーノーではないこと、かつヒルファディングは帝國主義を金融資本の愛好する政策であると規定し、資本主義經濟の新しい發展段階としなかつたことを強調し、ひたすら自説の擁護に努めている。

ちなみにカウツキーが自負している彼の論文というのは、一八九八年『ノイエ・ツァイト』誌上に掲載された『舊い植民政策と新しい植民政策』（"Aeltere und neuere Kolonialpolitik,"）のことであるが、この論文の關するかぎりでは、カウツキーが金融資本の支配する獨占期の資本主義を念頭においているかどうかは、すこぶる疑わしい。たとえ彼が高度金融や資本輸出の意義を強調したとしても、それだけで金融資本と表裏一體の關係にある獨占的工業資本をとりあげたと主張することは、強辨に失するであらう。金融資本という獨自の概念を新しく鑄造した榮譽は、

何といつてもヒルファードィングに歸せられなければなるまい。ともあれ、金融資本は帝國主義の原因であり、帝國主義は金融資本の作用であるという理由から、カウツキーは『原因としての金融資本とその作用としての帝國主義とは、區別しなければならぬ』ことを強調し、『この政策を取扱う多くの論者は、細い點で異見があるにせよ、それを政治の特殊な體系と解し、『經濟段階』『進歩した自乗された資本主義』とせず、そのもとにある支配的な資本家層の政策と見る點では、ほとんどみな一致している』（原本一一一頁、波多野譯本四八頁）と述べ、もつてクローノーに一矢をむくいているのである。

五

クローノーはカウツキーの批判に對し、ただちに筆をとつて抗辯を試みた。『幻想崇拜』（"Illusionen-Kultus"）と題する論文がそれだ（Die Neue Zeit, 33. Jahrg. 2 Bd. S. 172 ff. S. 199 ff.）。カウツキーの批判にも拘らず、彼はカウツキーの概念規定の仕方に異論を唱え、あらゆる角度からカウツキーの定義の缺陷を衝こうとしている。以下、その要點を摘記しよう。

第一、カウツキーの定義は、單に近代の帝國主義的植民政策にあてはまるだけでなく、ほとんどありとあらゆる植民政策にあてはまる。従つてそれは、新しい植民政策の近代的帝國主義的特色を顧慮しないという譏りをまねがれぬ。植民政策は、カウツキーの主張するように、『あらゆる工業資本主義的國民の渴望（Drang）』から出て來るのではなく、資本主義的『國家』の渴望から出て來るのである。いいかえれば、帝國主義の擔い手は國民でなくて、國家なのだ。主たる推進力として今日の植民政策の背後にたつものは、工業資本主義ではなくて、金融資本である。

兩者の差違については、すでに前世紀の九〇年代の終りごろから、自分がしばしば言及したところであり、たとえ金融資本という言葉は用いなかつたにせよ、銀行資本 (Bankkapital) とか銀行金融 (Bankfinanz) とかいう言葉で表現した。

第二、カウツキーの定義は、他の點においてあまりに狹すぎる。それはこんにち帝國主義的なものと呼ばれている政治的諸現象の一部しか含まない。すなわち外國において鐵道・鑛山・土地などに關する利權を獲得しようとする努力 (例えば、日本が中國に要求したような)、外國に鐵道を供與することによつて金融的な依存關係に陥らしめる大金融團の努力 (例えばバクダット鐵道のごとき)、隣國の鑛山や炭田を收奪して、膨脹する大工業に低廉な原料を供給せんとする國の努力、特定の商業政策的ないし植民政策的計畫の確保のため遠隔の地に海軍根據地を設定すること、限定された海洋の一部に對する支配權を獲得せんがため、おそらくはまた時として固有の植民地の領有を擴大せんがため、外國の一部に運河を構築することなど、およそかくのごとき努力および企業は、カウツキーの帝國主義概念の中にはいらぬこととなる。

第三、カウツキーは、帝國主義という言葉の意味が時の經過につれてしばしば變つた、と述べている。それは全く正しい。二〇年前までは、ドイツでも帝國主義という言葉はイギリス流に大英國 (Great Britain) をめざす政治的努力という意味によく使用されていた。けれどもドイツやその他の國では、こうした意味は考慮にはいらなかつた。というのは、文化的に發達した獨立の植民地をもたなかつたため、それを一つの帝國に結集することができような事情でなかつたのである。が、同時に政治生活においては、別く別個の對外的な膨脹の努力が起つた。それとともに言葉の意味も變つた。そして今日では、『世界政策的』(weltpolitisch) というのとはほぼ同じ意味をもつようになる。

つた。ただし、決定的な意味に達したわけではない。なぜなら、金融資本の『價值増殖慾および擴張慾』は、植民地または外國にひろがつているだけでなく、自己の版圖内にも及んでいるのであつて、そこに新しい經濟現象が起つてゐるからだ。

クローノはおおよそ以上のごとく論じたのち、結局どんな結論に到着することができたであらうか。それは至つて簡單である。いわく、『金融資本主義の生活條件および發展條件から生じた一切の政策を帝國主義的と名づける』。これはとりもなおさず、帝國主義とは經濟の發展段階だという彼の當初の定義づけから、帝國主義は金融資本の政策だというヒルファードイング流の定義づけに移行したことを意味する。だが、もしそうだとすると、クローノ對カウツキーの距離は、論争を通じて決定的な點で著しく狭ばまつたといわねばならぬ。

六

クローノの反駁に接するや、カウツキーは『重ねてわれらの幻想を論ず』(“Nochmals unsere Illusionen”)と題する論文を草し、同じ年の『ノイエ・ツァイト』誌上に發表した。左にその論旨を要約しよう。

第一、クローノは一方で、カウツキーの定義は狹ますぎると批評している。つまり外國に鐵道を敷設しようとする努力、鑛山を開發しようとする努力、寄航地を設け、運河を開く努力なども、帝國主義の中に含ましめねばならぬというのだが、それは自明の事柄に屬する、とカウツキーは答える。カウツキーによると、問題はむしろ如何なる國外の地域を志向するかにある。そしてそれはまさしく農業地域にほかならぬではないか。資本が國外の地域に入り込むのは、單に農業の振興のためではなく、發達した工業資本主義を有しない地方、いいかえると、まだ主とし

て農業生産の行われている段階の地域に入りこむのだ。それゆえ、定義が狭きにすぎるといふ批評は、とうてい承服することができない。

第二、クーノーは一方で、カウツキーの定義は狭きにすぎるといながら、他の關連においては、逆にカウツキーの定義は廣すぎる、という。つまり、帝國主義的な植民政策にあてはまるばかりでなく、あらゆる植民政策にあてはまるという非難を浴びせている。もし自分の定義が、ひろく農業地域の併合または抑壓に對する努力を指すものならば、あるいは當つているかもしれぬ。しかし自分は、『高度の發達をとげた工業資本主義』からそうした努力が生まれることをもつて、帝國主義の特徴と見るのである。それゆえ彼のいうように、近世初期のポルトガル人の植民政策にあてはまるわけではないし、スペインやフランスの植民政策にあてはまるいわけもない。ましてオランダの植民政策には、なおさらあてはまらない。これら諸國の植民政策の推進力は、むしろ封建貴族であり、彼等の子孫のために新しい領土を求めたのであつて、それは新大陸の發見された後には、きわめて容易に海の彼方に見出されたのであつた。それとならんで、商業資本の参加が注目される。オランダわけでもイギリスでは、商業資本が貨幣取引資本とともに植民政策の決定的要因となつた。いなイギリスにおいては、一九世紀まで封建貴族が重要な役割を演じたのである。

工業資本はこうした植民政策を利用したこともないではなかつたが、だいたいにおいては嫌忌したといつてよい。なぜなら、それは利益よりも費用と損失をもたらしたからだ。工業資本が成長すればするほど、資本主義諸國では植民地に對する關心が薄らいでいつた。

ところが最近の段階になつてから、すなわち三〇年來このかた、工業資本はようやく植民地に對して關心を抱く

ようになった。工業資本が力と重要さを加えるにつれて、ますます植民地的膨脹政策は、國家の政策の中心點に進み、かくして植民政策は全く新しい特殊な性格をおびるようになった。それは以前の植民政策から區別されなければならぬ。後者はとりもなおさず帝國主義的政策だということができる。

第三、クローノーによると、今日の植民政策の背後にある推進力は、工業資本主義ではなくして金融資本である、という。彼は金融資本という言葉をも、單純に銀行資本ない銀行金融と同じ意味に用いている。實は自分もしばしばそうした用法をつかつているのだが、ヒルファーディングの用法は、はるかに嚴格な規定に従っている。もしわれわれにしてヒルファーディングの用法を承認するとするならば、工業資本と銀行資本とが合體して、より高度の統一體となつたものこそ、金融資本だといわねばなるまい。

クローノーが、今日の植民政策の背後にある主たる推進力として、銀行資本を指摘したのは正しい。けれども工業資本主義がその背後に存しないと主張しようとするなら、それは正しいといえないであらう。なぜかというに、帝國主義時代の特徴は、工業資本と銀行資本の同一視の増大にあるのであり、この同一視から工業資本の植民政策に對する關心の増大が生れるのだ。が、そこからまた帝國主義の内部的對立も生じる。それは工業資本によつて促進されるとはいえ、工業の障害を乗りこえもするのである。これらすべての要因を含むかぎりにおいて、自分はあくまで自分の定義を正しいと信じ、これを固執する。

以上數節にわたつてクローノー對カウツキーの論争の經過を見た。いま振り返つて考えると、論争を通じて双方の見解の相違は著しく狭はまり、互いに相接近したことを認めないわけにはいかない。なかんずく特筆に値するとおもわれる點は、つぎの二つである。

第一、論争はまず、帝國主義は資本主義の一定の發展段階を意味するか、あるいはそれに照應した政策體系を意味するか、という形で口火を切つた。しかし結局においては、政策として規定することに、双方の見解が落ちつたと見ることができる。

第二、争點の他の一つは、帝國主義の推進力は金融資本か工業資本かという點にあつたが、これも論争の過程において實質的にはほとんど歩みよりがついた、といつても過言ではあるまい。いう意味は、兩者はいずれもせいぜいヒルファァーディングの亞流にすぎないということである。もつと忌憚なくいうなら、ヒルファァーディングより一步後退しているとさえ、いえるかもしれない。ただし、カウツキーはとりわけ獨占を強調することを怠つてゐるからだ。カウツキーが明白に獨占を前面に押し出すようになったのは、一九一七年の論文『帝國主義戦争』(『Der imperialistische Krieg』, Die Neue Zeit, 35 Jahrg. 1 Bd.)に於いてである。

七

クローノーとカウツキーの間に論争がかわされたのは、前定のとおり一九一五年の出来事であるが、翌々年の一九一七年に、レーニンの『資本主義の最高の段階としての帝國主義』が、ペトログラードで出版された。一九一六年上半年の執筆と伝えられるこの小冊子は、周知のごとく自説の展開に加えて、カウツキーの批判をその重要な構成部分とするものである。むろんその中には概念規定の批判も含まれている。レーニンはいふ『帝國主義の定義に關して、われわれはまず第一に、いわゆる第二インターナショナルの時代すなわち一八八九—一九一四年の二五年間において主たるマルクス主義理論家であつたK・カウツキーと論争しなければならぬ』(前掲書、第七章)と。彼

はカウツキーの定義に肉迫したのち、次のようにこきおろしている。『この定義は全く何の役にもたたない。なぜなら、それは一面的だから。すなわちそれは、勝手に民族問題だけをとりだし（この問題がそれ自身としても、また帝國主義との關連においても、きわめて重要であるとはいえ）、しかも勝手に、かつ間違つて、この問題を他民族を併合している國の産業資本とだけ結びつけ、しかも同じく勝手に、かつ間違つて、農業地域の併合ということを特にとりだしているからである』（同上）。要するに批判の主眼は、カウツキーの定義が明確な基準を缺き、あまりに恣意的だ、というにあるらしい。念のため整理すれば、論點は三つに分れる。第一、民族問題を最前面に押出したこと、第二、帝國主義の推進力をもっぱら産業資本に見出し、金融資本の重要性を看却したこと、第三、帝國主義の對象として農業地域のみをとりあげ、工業國を蔑外視したことが、それだ。問題を保留したまま、さきへ進もう。

『帝國主義とは併合を追求する渴望である、——カウツキーの定義の政治的部分はこれに歸着する。この部分正しい、だがきわめて不完全である。なぜならば、政治的に、帝國主義は一般に暴力と反動とを追求する渴望（*Desire*）だからである』（同上）。すなわちレーニンは、カウツキーの定義の政治的部分をいちお正しいと認めているのであつて、正しい事は正しいが、不完全だといふのである。しかしレーニン自身はかの箇所ですべて定義というものは、けつして現象の完全な發展におけるその全面的な連關を包括できるものではない』ことを指摘し、『あらゆる定義につきものの制約的・相對的な意義を忘れ』てはならぬことを強調している。してみれば、帝國主義が暴力と反動とを伴うことを概念規定の中に包攝するか、しないかは、それほど問題にしくてもよくはないだらうか。ただし帝國主義の批判に際して、暴力や反動を見逃してよいというわけではない。

レーニンがとりわけ重視するのは、カウツキーの定義にとりいれられてゐる事態の政治的側面ではなくて、むしろ

る經濟的側面である。ところでこの角度から見るとき、『カウツキーの定義の中の誤りは全く重大である』とレーニンは主張する。が、重大なる誤りとは、いつたい何なのであるうか。いわく、『帝國主義にとつてまさに特徴的なものは、産業資本ではなくて金融資本である。フランスで前世紀の八〇年代以來、まさに金融資本の特に急速な發展が、産業資本は衰退したにも拘らず、併合（植民）政策の著しい激化を喚び起したことは、けつして偶然ではない』（同上）と。われわれはここに、クーノー對カウツキーの論争でとりあげられたのと全く同じ問題の再登場を見出す。それはともかく、レーニンは自説を裏書きする具體的例證として、フランスを引合に出している。しかし、果してそれが適切な例證でありうるかどうか、いささか疑問なきをえない。

第一次大戰以前のフランスは、老大な對外投資をもち、イギリスにつぐ世界第二の債權國であつたこと、國民の貯蓄心が旺盛で、資本の蓄積は豊かであり、その少からぬ部分が國外に投資先を見出していたこと、十九世紀の末葉から二十世紀のはじめにかけ、植民地獲得のため果敢なる對外進出を試みたこと等は、ひろく一般に知られているところである。けれども普佛戰爭の結果、アルサス・ローレンを奪われたフランスは、重工業の基盤を喪失し、その結果、資本主義的獨占の發達はいたつて微弱であつた。國民のなかばは農民であり、産業としては中小企業が多い國柄である。フランスで大工業が勃興しなかつたについては、二兒制度で有名な計畫出產の慣習や特殊な農地相續制度に伴う産業豫備軍の不足も關係が深い。したがつてヒルファーディングがドイツ資本主義の構造分析の上にたつて打ち建てた『金融資本』の範疇、すなわち獨占的な巨大産業資本と獨占的な巨大銀行資本との癒着という圖式を、むづろさにそのままフランスの場合にあてはめることは妥當であろうか。少くも産業獨占——銀行獨占——過剩資本——資本輸出という一連の系列を重要視するレーニンの立場からすれば、産業獨占の未發達であつた

フランスを引合に出すことは適切ではないようにおもわれる。ただし巨大産業資本との結びつきがなくても、巨大銀行資本でさえあれば、金融資本と名づけるというのなら、問題は別であるが。

レーニンのカウツキー批判はさらに続く。『帝國主義にとつて特徴的なものは、まさに農業地域だけではなく、工業地域の併合をも追求する渴望である。なぜなら、第一に地球の終局的分割が行われた以上、再分割に際しては、どんな土地へも手をのばさなければならぬからであり、第二に帝國主義にとつては、ヘゲモニーを獲得しようとするわち直接自國のためでなく、むしろ敵をよわめてそのヘゲモニーを覆えすために——、土地を占領しようとして努力しているいくつかの強國の競争が、本質的だからである』（同上）。レーニンの語るところは、農業地域への進出とかざらず、工業國すなわち高度資本主義國の併合をも辭さないのが、帝國主義の本質だといふにある。彼がこの書物を執筆していた時分は、大戰の最中であり、ドイツ軍のベルギー侵略やフランス侵入が眼前の生々しい事實であつたことをおもふと、こうした主張がなされることは、少しも奇異ではない。しかし一般論として帝國主義を考察する場合、第一次的にまず先進資本主義諸國の後進非資本主義地域への進出として把握することは、至當であらう。このことはもちろん、それが契機となつて資本主義諸國の對立を激成し、戰爭の勃發に導くや、資本主義諸國相互間の死活的闘争に轉化することを否定するものではない。しかし後者は、あくまで二次的な現象として把握することができるし、また把握すべきであらう。

つぎにレーニンは、帝國主義を政治活動と規定するのがイギリス流の傳統的な見解だといふカウツキーの主張に對して反駁を加えている。いわく、『カウツキーがイギリス人一般を引合に出すのは、事實上絶対に誤りである』（同上）。レーニンはその證人としてホブソンをあげる。周知のごとく、ホブソンは、近代の新しい帝國主義を舊

い帝國主義から區別する特徴として、二つの點を指摘した。第一は單一の強大國ではなく、多數の強大國の角逐であること、第二はその本質が經濟的利益を追求する政治的膨脹という點で共通であるが、商業ないし貿易上の利益より金融ないし投資上の利益が重要性を増したこと、これである。さてレーニンはいう、『カウツキーはみずから引き續きマルクス主義を擁護していると稱しながら、實際には社會自由主義者ホブソンに比べてさえ一步後退している』と（同上）。なぜであるか。いわく、『もし工業國が農業國を併合するということが、主として問題になるならば、これによつて商人の支配的役割が前景に押し出されるであらう』（同上）と。高度工業資本主義國の後進農業地域に對する政治的・經濟的支配ということが、なぜ商人の支配的役割を意味するのか。わたくしはこれを理解するに苦しむ。カウツキーといえども、資本輸出を強調する點では、けつして人後におちるものではないのである。ともあれ結局のところ、概念規定をめぐるカウツキーとレーニンとの決定的相違は、一方が帝國主義の本質を高度工業資本主義諸國の對外膨脹政策に見出すに反し、他方が資本主義の獨占段階そのものに見出す點にある、といえるであらう。政策か經濟段階かの問題は、クーノー對カウツキーの論争においてすでに一つの焦點をなし、いちおうの終結を見た問題であつたが、いまやレーニンによつてふたたび脚光を浴びることとなつた。